
海老とマヨネーズと玉子

阿久瀬劣化

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海老とマヨネーズと玉子

【Nコード】

N3319X

【作者名】

阿久瀬劣化

【あらすじ】

夏休みが明け、新学期が始まるうとしていた。しかし、生徒・江津真夜音にだけは校長から驚愕の事実を伝えられる……

〈EPISODE 1 転校〉（前書き）

思い付きで書いてみた小説です。地の文がやたらつらつらと長いですし、駄文ばかりで読みづらさが目立ちます。不定期で更新したいなあ、とか思っております。

〈EPISODE 1 転校〉

夏休みが明けた。長期の休暇を経て再び学校生活が始まり、生徒達はみな揚々として休暇中の思い出話で盛り上がっている。その中、ただひとりの生徒、江津真夜音だけは校長室に呼び出されていた。理由は当の本人でさえ、知らされてはいない。

校長室の扉をトントンとノックをして、「失礼します」と木製の取手に手を掛け、扉を開いた。扉の先には堂々とした風貌でソファ―に座している校長の姿が目に移る。真夜音は軽く会釈をして、校長と対面のソファ―に腰を降ろした。

「さて」と校長は話を切り出す。同時に、真夜音はゴクリと固唾を飲んだ。二人の間に緊迫した空気が張り詰める。そして、開口一番、校長の放った驚愕の一言を耳にする。初めは聞き間違いだとも思っただ。その真偽を問うように真夜音は思わず復唱してしまう。

「転校……ですか？」

校長が持ち掛けた内容とは真夜音の転校のことだったのだ。それは真夜音にとって突然過ぎる話である。入学してから僅か半年での転校。体中の全意識が脳に集中するものの、それはただ意識同士が複雑に絡み合うだけ。事実を受け入れることができない真夜音は校長に恐る恐る尋ねる。

「理由を聞いてもよろしいでしょうか」

静寂した空間に真夜音の声がぼつりと響く。対して校長は平静を保っていた。紅茶を一口啜ると、その質問の応答を考えるかのように

沈黙は続いた。それから一分ほどが経過するが、未だに沈黙は続いていた。真夜音は一点を見つめることもできず、視線をキヨロキヨロと動かし、落ち着かない様子である。表面上では平然としてはいたが、内面では動揺をしていた。それでも、ぐっと唇を噛み締めて沈黙の重圧に耐えていた。校長室に飾られている壁掛け時計の針音に真夜音の意識は自然と奪われつつあった。そして、校長は再び紅茶を一口啜ると、口を開いた。

「あなたは女性としてのたしなみが欠如しています」

暫時の間に考えて出された答えは実に漠然としていた。その答えにしっくりとこない真夜音は頭の中で疑問符を浮かべていた。その意図と内容を把握しきれしていない真夜音はさらに質問を続ける。

「どういうことでしょうか」

真夜音は単刀直入には聞かず、謙虚な姿勢で尋ねてみた。それは納得のいかない事実を素直に受け止めたくない、という真夜音の意志が込められていた。質問に対して校長は「はあ」と溜め息をひとつ吐くと、厳然とした態度で真夜音に説明を始めた。

「あなたは掃除や料理を始め、女性としての最低限の振る舞いが出来ていない生徒として名が挙がっています」

控え目で遠回しな言動もなく、真夜音に向かってきつぱりと言った。真夜音はその言葉に対して「はあ」としか返事ができない。勿論、真夜音自身に心当たりがあるからである。

この地域では唯一の女子校であり、名門上位校でもある悦宮女学院。そこにめでたく入学することになった真夜音。受験の形式は一般試

験で挑み、結果も悪いどころか優良な成績であったため、見事合格を手にすることができた。

しかし、入学したは良いものの、女性を象徴とする校風に逆らう性格である真夜音にとつて、この学校は不向きであったのだ。料理・掃除に関する知識がゼロどころか、マイナスに至る酷さであり、さらに女性としての品のある言葉遣いにも他の生徒とは浮いたところがよく目立った。故に校内では噂が立つ程の生徒に落ちぶれる。そして、半年が経ち、今まさにこの状況下に置かれている、というわけである。校長が続ける。

「そのような生徒がいると、名門校の歴史に泥を塗る結果となってしまう」

校長の言い分は至極正論であったため、真夜音は何も言えなくなっ
てしまい、恥ずかしさのあまり俯いてしまう。それを見た校長は呆
れ、再び溜め息を吐いた。さらに校長は続ける。

「つまり、あなたには女性の気品を覚えてもらうために、暫くの間
分校に通ってもらいます」

全てを納得し、理解し、真夜音は半ば諦めた。今を振り替えると「
なんて馬鹿だったんだ」と後悔したが既に遅かったのである。校
長も鬼ではないので「あなたのためにも悪い話ではない」と一応の
フォローを入れた。

そして、時間の経過と共に再び沈黙が訪れる。校長がティーカップ
に手を掛けたとき、真夜音が顔を上げて口を開く。

「……わかりました」

この時既に真夜音は全てを諦め、次の道を歩くことを決意する。若干の心残りはあるものの、全てを振り切った。校長はティーカップをテーブルに置き、手を離れた。ソファアールから立ち上がり、真夜音に背を向けると、一言告げた。

「すでに手続きは済んでいます。明日から分校の方に通ってもらいます」

「……はい」

こうして校長との対談は終わりを迎えた。真夜音は自分のカバンを掴むと、ソファアールから立ち上がり、「失礼しました」と一礼をした。校長はポッドの茶葉を入れ換えながら、こちらに優しく微笑んだ。そして、「がんばってくださいね」と最後に言葉を掛けられ、少しだけでも元気付けられた。そう、明日も上手くやっていける。真夜音は前向きな気持ちで校長室を後にした。

こうして、半年の本校生活は終わりを告げるのだ、と勝手に思い込むのも真夜音くらいだ。今後、どのように進むかは自分次第であるということに真夜音はまだ気付かないのであった。

誰もいなくなった一室で、校長はひとり呟く。

「……また会えるといいですね」

〈EPISODE 1 転校〉（後書き）

誤字・脱字はありましたでしょうか？もし、ありましたら、報告してもらえると助かります。

興味があれば、陰ながら応援してくれると嬉しいです

《EPISODE 2 登校》

翌朝。びびびびび、と携帯電話のアラームが鳴る。反射的に布団から体を起こすと、慣れた手つきでアラーム設定を解除した。そして、呆けた頭で昨日のことを思い出す。

半強制的な転校ではあったものの、全てを振り切った真夜音。夢や幻であってほしいと願いたい。しかし、これは確かな現実なのである。そして、いつもとは変わらぬ朝であり日常であるというのに、何より体が重く、精神的にそわそわとして落ち着かないのだ。

せめて心の猶予だけでも欲しい。そう校長に頼んでおけば良かったなあ、と今になって後悔した。いわゆる後の祭りである。とはいっても、編入初日から休むわけにもいかない。真夜音は渋々と重い手足を動かし、荷支度の準備にとりかかった。

本校と同じ通りに、今まで使っていた教科書を鞆に積みようとした。教科書を鞆に敷き詰め、チャックに手を掛けた時、真夜音はふと思う。そういえば、教科書は本校のままでもいいのか。顎に手をあて深く考え込む。真夜音は些細なことでも、一度気にし出したら止まらないのだ。しかし、それが裏目となり、この疑問をきっかけに不安が連鎖する。

まず第一に編入することは伝えてあるのだろうか。校長からは何も聞かされていない。次に自己紹介はどうしようか。これをしくじると今後の学校生活に支障が出てしまう。そもそも分校に関する書類を一枚も配布されていないではないか。新たなスタートという期待と先の見えない不安。両者の重圧に潰されそうになり、真夜音の心音は大きさをなくらいに鼓動を早める。その音を意識すればするほど、

自分で自分を悪い方向へと暗示してしまうのであった。

大まかな荷支度を済ませ、こっそりと玄関に向かった。ただ、誰かに胃をぎゅうつと握られているような痛みが真夜音を襲う。何も口にしていないのに胃物、というよりは臍物が引き擦り出されそうな感覚に近いのだ。もちろん、朝食どころではない。

靴を履いていると、リビングからひよっこり顔を出したのは真夜音の母親、侑希だ。侑希は密かに家を出ようとしている真夜音を見つけて、呼び止めた。

「朝食はいららないの？ 今日もエビマヨご飯だけ……」

不安げに尋ねると、真夜音は蒼白な笑顔を侑希に向け「大丈夫、今日はいららないや」とパタパタと手を振ると、鞆を掴み、飛蝗の如く家を飛び出した。

真夜音の体調は未だに優れず、お腹を擦っていた。原因は不安やプレッシャーによる精神的な緊張である。一呼吸置いて、家を出ればよかったものの、そういうわけにはいかなかったのだ。もちろん、これには本意がある。

転校の件で迷惑をかけてしまったことを侑希に申し訳ないと罪悪を感じた真夜音。しかし、侑希は怒らずに、そっと真夜音の頬に手を添えて微笑んでくれた。その温もりに触れた時、自分自身の過ちの愚かさを噛み締める。母親の気遣いは真夜音にとって大きな責任になってしまった。

もう迷惑はかけたくない。それでも、真夜音には侑希が心配しないように気遣うくらいしかできなかったのだ。

数分歩くと、最寄りの駅に着いた。この駅は本校に通う時にも用いていた駅である。以前は本校のある都会へ向かう上りの電車だったが、今後からは分校のある田舎へ向かう下り電車を使うことになる。

改札口を出て、ホームで下り電車を待つ。電車が来る時間まで、あと数分であることを確認する。すると、アナウンスがホーム全体に流れた。それは真夜音の待つ電車ではなく、以前まで自身が使っていた上り電車が到着する合図であったのだ。

見慣れた電車が姿を見せる。真夜音はやはり気になり、ふと目をやる。ぷしゅー、と扉が開くと、その奥には紺色の生地に赤いラインの入った制服を着た女子学生がいたのだ。本校の生徒である。

真夜音は気が強張った。あの生徒に見られているわけでもない。小馬鹿にされているわけでもない。今下り電車を待っている『私』に憤りを感じているからだ。私はあの時振り切ったのに、何故こうも苦しいのだろう。真夜音は複雑な衝動に駆られた。そして、上り電車は冷ややかな車体をレールの上に滑らせ、この駅を後にした。

やがて、アナウンスとともに下り電車は到着した。真夜音は逃げるように乗車すると、目的の駅である三代幹駅へとただ身を委ねた。

電車は真夜音の体を揺らし、滑走する。その揺れというのは今の真夜音にとって非常に安らかなものだった。この不安な情緒を取り除いてくれるゆりかごのような。うつらうつらと微睡みながらも、やがて真夜音は心地のよい眠りについてしまうのであった。

次は　　。車内に響く車掌の声。その拍子に真夜音は目を覚ます。もしかしたら乗り過ごしたかもしれない、とアナウンスに耳を凝らした。が、肝心な声はトンネルの反響に掻き消されてしまった。

潔く構えていると、見事に次の駅は目的の駅である三代幹駅だったのだ。ちよつとばかし、ほっと安心をした。それに先の快眠の故、幾分か体が軽い。真夜音は軽い足取りで電車を降りた。

このぼろくて寂れた駅を抜けると、辺りには自然と住居がいい塩梅で広がっていた。都会ではあるものの、田舎のようで空気が清々しい。ただ、時間のせいか見渡しても人氣が少ない。

真夜音は地図を広げ、分校への道を辿った。駅を離れると住居らしい住居は見当たらず、歩いて歩いても自然が続くのだ。まるで本当の田舎だ。それでも、入り組んだ都会よりかは、一本道ばかりで楽である。

いつしか緊張も忘れ、鼻歌を歌うくらいの余裕を持つことができた。この時は生徒の姿が少ないということに気にはいなかった。

数分歩くと、白壁の校舎が真夜音の目に移った。その全容はヨーロッパの建築物を連想させるもので、とても凛々しい。これが分校とこののだから驚いてしまう。

それにしても生徒も先生もまだ見えない。登校時間にしては早すぎたのか。真夜音は特に気にもせず、校門を潜った。

と、ここに来て事の重大さに気付く。真夜音は下駄箱の位置は愚か校長室・職員室の位置、この無駄に広すぎる校内を一も把握していなかった。それは誰がどう考えても当然である。

安堵な気持ちが翻り、不安な気持ちが真夜音の心を鷲掴みにして離そうとしない。鼓動が高鳴り、足が震える。胃の中がぎゅるぎゅる

と蠢き出す。真夜音は再び焦燥に襲われた。

とにかく、状況を変えたいがために、真夜音はこの場を離れ、彷徨してしまっただけであった。

《EPISODE 2 登校》（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

それと、みなさんの多数のアクセスが嬉しいです。

……ですが、こんな地の文ばかりの構成で嫌気を感じたかもしれませんが。普通に多いですね。次回からは少し減る予定です。

それと、分割して投稿しますので、まとめて読みたい方は一年後来てください……自分なりの冗談です。

《EPISODE 3 邂逅》

焦りと不安が募り、ただひたすら目的の下駄箱を目指す。だが、考えもせず、闇雲に探すだけでは、自ら迷路の奥に飛び込むようなものであった。

やや涙目になりながら、とにかく走って走って走った。今は下駄箱よりも、真夜音は誰かに会いたかったのだ。生徒でも先生でも警備員でもいい。心に憩いが欲しかった。その望みを求めて、このだっ広い校舎を走り続けた。

時間も迫る中、どこに行く当てもなく校舎外を駆ける。ふと真夜音の耳には「ひゅっ」と空を切るような音を捕らえ、走っている足を止めた。惹かれるようにその音を辿る。そこには道場があったのだ。

そして、また空を切る音がする。真夜音は耳に意識を傾け、音の正体を探った。……道場の裏方からだ。

そう確信して、道場の裏方に回った。

警戒しつつも多大な希望を胸に、真夜音はそおつと覗いた。そこには緑の黒髪を揺らし、真つ直ぐな眼差しを向けている生徒がいる。その正体は竹刀を懸命に降り下ろす少女であったのだ。真夜音はその迫力と流麗さに目を奪われていた。

(すごいなあ……)

真夜音はつい夢中になり身を乗り出しすぎた。と、その黒髪の少女は真夜音の視線を察知したのか、竹刀を振るう手をびたつと止める。

真夜音も瞬発的に身を隠す。

そして、こちらをじいっと見つめると、すたすたと歩いて来たのだ。真夜音はあたふたとしながら、何を言えばいいのか戸惑ってしまった。

そして、二人が鉢合わせになる。黒髪少女は覗き込むように真夜音の顔を直視した。思わず真夜音は不意をつかれ、適当に口走ってしまっていた。

「あ……お、おはようございます」

突然の挨拶に「しまった」と内心想う真夜音。だが、黒髪少女はあたかもその返事が無かったかのようにただ見つめているだけ。どうすればいいのか、真夜音は困惑しながらも、今の自分の置かれている現状について話そうとした……時だった。

「……………」

黒髪少女は左手を伸ばす。真夜音の濡れた右目を人差し指で軽く拭いたのだ。少女の柔らかな手が触れると真夜音は動揺とは違う心の揺らぎを感じた。

「何かつらいことでもありましたか？」

「いえ……迷子になってしまった」

真夜音はさらっと少女に話してしまった。戸惑いもなくすんなりと対して少女は「ああ、なるほど」とばかりに納得していた。そして、軽く笑みを投げ掛ける。

「事情はわかりました。少しここで待っていてください。着替えます」

少女はたたつと小走りに道場の中へと駆け込んだ。その際、なびいた髪が甘い余香を残し、それが真夜音の緊張を解いた。数分後、少女は制服に着替えて、真夜音のもとに駆け寄った。

「お待たせしました。では、行きましようか」

と、真夜音の右手を握る。いきなりの行動は真夜音の動悸を早めた。見知らぬ女の子に手を握られたからなのか、少女の柔肌に触れたからなのか。本人でさえ定かではなかったが、一つだけは明らかであった。

「う、うん……」

真夜音は自然と少女に含羞を浮かべていたのだ。

少女は真夜音の手を引きながら、下駄箱へ案内した。少女の後ろで真夜音はただ身を預けているだけ。何か話しかけようにも気まずさと恥ずかしさが真夜音の口を阻む。そんな中、少女が口を開いた。

「転校生さんですよ。何年生ですか」

直球な質問だった。こんなにも大胆な質問を初対面の人間にするだろうか。真夜音は豆鉄砲を喰らったようにきよとんとした。

「えー、高一です……そちらは」

やはり、この少女のように大胆にはなれない。仮に先輩方としたら、余計に気まずい。真夜音は腰を低くして聞いた。

「奇遇ですね。私も一年生ですよ」

「あつ、そうなん……ですか」

意外にも同じ学年だった。少女はふふつと弾んだ声で微笑む。竹刀を振るっていた彼女と今の楽観的な彼女とは、まるで別人のようだ。真夜音は呆れて返事に困ってしまった。

「同じ学年なんですから、敬語は使わなくてもいいですよ」

「……えつと、うん」

もう何かと突っ込みを入れるのはやめた。彼女は真性の天然少女である。それはどんな見方をしても紛れもない性格である。ただ、そんな茶目っ気のある少女に真夜音は心をくすぐられた。

噛み合ってるようで噛み合わない会話をしながら、校内を案内する少女。下駄箱の場所も丁寧に教えてくれた。靴を上履きに履き替えると、次に校長室、最後に職員室と必要充分なまでに紹介してくれた。

「はい、これでだいたい案内できました」

少女はくるりと顔を真夜音の方に向けて、ふわりと笑顔を浮かべた。そんなにも優しさで溢れているものを見せられると妙に照れ臭く、真夜音の頬は微かな朱色に染めていた。

「あ、あの、お名前を聞いても」

真夜音はどもる口を無理矢理開けて少女に思いつきで尋ねた。最後に知りたかったのだ、この少女の名前を。ここまで親切にしてくれた人を忘れるわけにはいかないから。

「……………久留日笑菜くるといすまです」

真夜音には笑菜が半ば驚いているように見えた。僅か数分だけの付き合いだが、同じでも僅かに違う表情の変化を覚えている。それが少女の何百分の一の表情だとしても、真夜音にとっては一つ一つが心に刻まれていた。もちろん、この表情は今初めて見るものだ。

「久留日さん……………ありがとう」

「いえ……………お気になさらず。それでは教室に戻ります」

真夜音の言葉に笑菜の頬も薄い桃色に染まる。笑菜はずっと繋いでいた真夜音の手を恥じらうように離し、それを後ろに隠してしまう。そして、先までの余裕とは裏腹に、笑菜はぎこちない小走りで廊下を駆けていった。

真夜音はそんな笑菜の姿を見送りながら、不意に薄ら笑いを浮かべてしまうのであった。

〈EPISODE 3 邂逅〉（後書き）

後書きについてのも毎話やると、しつこいかもしれませんね。暫く自重します。

山場メインとなる話は〈EPISODE 8〜9〉あたりからと予定しています。

陰ながらの応援をよろしく願います。

〈EPISODE 4 編入〉

笑葉に案内してもらった校内。おかげで職員室に無事辿り着くことができた。そして、素敵な出会いを果たした真夜音。

今は職員室の前にいる。校舎の外装に比べると、意外にも公立の中学校と変わらないようなみすばらしい内装であった。

ただ、戸を開くのに躊躇してしまう。何も聞かされず、引率の先生すらいなければ不安もあたりまえのことである。もどかしい手が戸に触れるか触れないかの位置で震えている。

その時、ふとあの子の笑みが脳裏を過る。あのふわりとした柔らかかな笑顔。私の手を引いてくれたあの温かな手。後ろめたい思いを抱擁する優しさ。

その瞬間、真夜音に降りかかる負荷がふっ、と消し飛ぶ。体は軽くて軽くて、まるで風船のようだ。今の真夜音にはもう気がかりがない。くすっと思いつい出し笑いをすると、真夜音はもう前を見ていた。

職員室をノックしようと、手を構えた時、視界が一変する。

「おっと…」

「あっ」

扉の先には琥珀色の髪をもった女性が佇んでいた。肩までかかるくらいの、世間一般でいうセミロングという部類に当てはまるのだから。そして、「おや」と、食い入るようにこちらをじいっと見つめ

ている。

「ん？よく見れば……おお、そうだそうだ思い出した」

既に面識のあるような素振りを見せるこの女性。しかし、真夜音にはこれっぽっちも心当たりなどない。初対面と断言できる。

「おっと、ごめん。ええと今日から君が入るクラス、つまり1-Aを受け持っている栖村です。よろしくね」

栖村は友好的な口調で快活に話した。真夜音も「こちらこそ」と軽くお辞儀をする。どうやら真夜音に関する情報は既にこちら側に届いているようであった。なるほど、道理で認識があるわけだ、真夜音は心身納得した。

「そうそう、今校長室へ迎えに行こうと思ってたんだけど……」

「……はい？」

「んーっと、その顔からすると知らなかったみたいだね」

真夜音は微かに顎を下げて頷き、そして呆れた。こちらにとっては誰が何と言おうとも無知同然なのだ。それなのに、自分自身の姿が滑稽なものに思えて、笑いがこみ上げてくる。誰のせいとは言わない。

「ま、そろそろ時間だし、教室に行きますか、ね」

栖村は真夜音のことを悟ったかのように目配せをする。それに気付いた真夜音も目で頷く。栖村はにこっと莞爾を見せ、真夜音の頭を

軽く撫でた。真夜音は照れくさいと感じながらも、仄かな安堵を得ていた。

教室に向かう途中、真夜音と栖村は歓談をしながら、悠長に歩いていた。おかげで真夜音は緊張することもなく、解れた心で平然を保つことができたのだ。

「ふうん、江津はそんな理由でこっちに来たのか」

「ええ、まあ……」

とはいっても、だいたいが栖村の一方的な質問ばかりなので少々飽き飽きしていた頃でもあった。それにしても、長つたらしい廊下である。

「ただなあ……こっちに來る時期が良いんだか、悪いんだか」

「……？」

栖村の意味深長な発言に真夜音は首を傾げる。真夜音がそのことについて言及しようとする、栖村は先の発言に上乘せするかのよう
に別の言葉を重ねる。

「その角曲がったら教室だからね」

あからさまに不自然な言動に疑問を隠せない真夜音。ただ、それが聞いてはいけない禁忌のように思えて、口が吃どもつてしまう。

そして、不明瞭な点も解決できぬまま教室に到着した。栖村は人差し指で下方を指差し、教室に入っ
ていった。「ここで待つて」と

いう合図だと察し、真夜音は待機することにした。

教室の中は静謐せいひつとしている。『編入生』という大きなイベントがあるというのに関わらず、しいんと静まり返っていた。改めて名門校……の分校だと自覚する。

暫くすると、栖村が引き戸を半分開いた。そこから顔を出して、今度は「こっちに来て」とばかりに人差し指を前後に動かす。そのサインに従って、真夜音は教室に入る。

だいぶ心に余裕をつくれた、今は落ち着きながら自分自身と対話できる。そう気休めの暗示をかけ、真夜音は恒心を胸に生徒等の前を堂々と歩いてみせた。

「はい、今日からこのクラスの一員となる江津真夜音さんだ」

栖村は駄弁を交えながらクラスの全員に話す。粗方の話しを終えると「じゃあ……」と真夜音の方に目をやる。そして、当然ではあるが自己紹介をする時間を設ける。教室がしんと静まる。軽く息を吸い込むと真夜音は声を発した。

「江津真夜音です。中途半端な編入ですが、今日からよろしくお願
いします」

女性に対して「勇ましい」という表現は似つかわしくはないが、それぐらいはきはきとした態度を見せつけた。

真夜音が喋り終わると、クラス中からパチパチと拍手が湧き上がった。ほっと息を吐くと、栖村が切り出す。

「それで席は……昨日用意してくれたのは誰だっけ」

栖村は辺りを見渡すと一番後ろの席に座る一人の女生徒がそつと挙手した。釣られて真夜音もその生徒に目を向ける。そして、驚愕した。艶やかな黒髪。温厚な眼差し。なんとその生徒は。

「おお、久留日だったか。……忘れてた」

栖村は後頭部をカリカリと搔くと、笑茉に真夜音の席を尋ねた。笑茉はにつこりと微笑を浮かべると、「ここですよ」と自分の横に置かれている空席を指した。

「というわけだ。じゃあ、席に着いてくれ」

きよとんとしながら、惚けたような返事をし、ふらりと空席に近づく。ついさっきまでの気丈な態度はどこへいつてしまったのか。驚きが驚きに重なり、どんな表情をしているのか真夜音自身でさえわからなくなった。今自分がどのような顔をしているか是非見てみたいものだ。

空席に着くと、笑茉が真夜音の方に身を傾けて小声で話し掛ける。

「これで会うのは二度目ですね」

またあの笑顔だ。柔らかい、温かい、そして優しい笑顔。隣の席でもあり恩人でもある生徒、久留日笑茉。思いも寄らぬ再会に真夜音は嬉しくて嬉しくて心が踊るような気持ちで溢れていたのだ。

《EPISODE 5 凶兆》

「じゃあ、HR終わりますよ……っ」と

栖村はそう言い残すと、とつとと教室を去っていった。

よく漫画とかの架空の世界では、編入してきた生徒の席の周りを囲いに囲う。そして、質問攻めの時間が始まる、という場面があるが、ちだ。

しかし、これは全くの流言飛語である。というのも、今の真夜音はその境遇に置かれていたからそのように明言できるのだ。

周りからの遠い視線が真夜音の気を咎める。一概に悪いとはいえない。そのような積極的な振る舞いというのは、上品なお嬢様方にとっては少々疚^{やま}しい行為なのかもしれない。そう感じてはいるもの、やはり視線が痛いことには変わらない。

「ねえ、江津さん」

穏やかに囁く声が真夜音は振り向かせる。もちろん、声の主はわかっている。

「もしよろしければ、校内を案内させてほしいのですが……」

笑葉が愛くるしい顔を差し出し、両手を合わせる。尖りのない澄んだ目は引き込まれるようで、ついつい見入ってしまう。これには否定する言葉が見つからず、肯定せざるを得ない。

「う、うん、構わないよ」

引きつった笑みを向ける真夜音に対して笑菜は喜悦に満ちた笑みを浮かべる。姦しさの一つもないこのクラスでは、ぱあっと明るい笑菜の雰囲気は逆に目立つものであった。それにしても、このクラスは気味が悪いほどに鎮静としている。

「それでは行きましょうか」

「……今から？」

「そうですね」

さも当然のように笑菜は述べた。これではあっさりとした返事に不審を抱いた真夜音が異常にみえてしまう。その常識じみた判断についていけない真夜音にとってはわけがわからない。

「さ、早く行きましょう」

「ちよ、ちよっと待って」

笑菜の黒髪はふわつと宙を舞い、そして散りばめる。困惑しながらも、すかさず追いかける真夜音。目の前ではしゃいでいる笑菜につられて自分も笑みが零れてしまう。笑菜は「ほら、早く」と手を差し出す。「うん」と真夜音は手を伸ばし、笑菜の手の平にそっと指を乗せた。真夜音は先のことなどもう忘れてしまっていた。

二人はお互いにはしゃぎながら長い廊下を駆ける。何かを話さなくても、ただお互いがお互いの側にいるというだけで、愉快的な気持ちで胸がいっぱいになった。

「ねえ、どこに行くの？」

真夜音は息を弾ませながら笑葉に問う。笑葉はふふふ、と笑い「内緒」と顔の半分を真夜音側に振り向かせた。やっぱりこの子といると楽しいな、と真夜音の心身は遠慮を必要としない幼少期の頃に遡るようであった。

季節は愁いを風諭させる秋でも、二人の間には逢着を運ぶ春のような和やかな温かさが漂っていた。

二人は丁度階段を下つているところだった。そして、今いる場所がこの校舎の中央に位置するB棟の一階である。今朝真夜音が探し求めていた下駄箱を通り過ぎ、その突き当たりに差し掛かる。

「まずはここですよ」

笑葉はそう告げた。真夜音が見上げると木製のプレートには『食堂』と書かれている。華奢な造りではない。

「ここが、食堂……」

「実はここ、ただ単にお昼を召し上がるところです。言い換えるなら『ランチルーム』とした方がしっくりくるかと思います」

「ああ、なるほど」

おっとりとした口振りで笑葉がまたも丁寧に教えてくれた。それに耳を傾ける真夜音。

「それでは、中に入りましょうか」

「……大丈夫なの」

「ええ、今は《争覇戦準備期間》の真つ最中ですから」

一秒程の間を置いてから、自分の耳を疑う。これまでの人生の中でも聞いたことのない複合語。不明瞭な点が多いこの学校であっても屈指の語で間違いないだろう。一つ一つを明確にしていくために、順に整理を始めようではないか。

『準備期間』これはわかる。前もって何かを用意する一定の期日。では、『ソウハセン』とは。まず、どういう漢字を当てはめればいいのかすらわからない。それに意味も知らない。

「……ソウハセンってどういう字？」

「ええと『争う』に、王道の反対の意味をする霸道の『覇』。それと『戦う』で『争覇戦』です」

さて、何故このような晦渋で物騒な言葉が、名門女子校の分校である生徒から発せられるのか。しかも、見た目からして上品で愛嬌のある女子生徒が口にする言葉であるのか。

「安心してください。後々説明があると思いますよ」

真夜音は誇らしげに胸を張る笑葉に「いやいや……」と心奥で冷静に突っ込む。笑葉はそんな真夜音をお構いなしに、扉の先へと入ってしまう。これが俗にいう真性の天然なのであろう。真夜音は笑葉の後を追いつ、食堂もというランチルームへと足を踏み入れる。

扉を開いた先に映ったものは、ここの食堂が確かに小さいということ、ともう一つ。薄暗い部屋に弱々しく灯る一つの蛍光灯。その下で本を読む女子生徒。山吹色の長髪を背中まで垂らし、突き刺さすような厳しい目つきで文庫本を睨んでいる。

「あつ、珠祈ちゃん」

その冷淡さを装った風に見える女子生徒に、親しみ深く呼び掛ける笑茉。真夜音は不意に心臓を強く叩かれるような衝動に駆られる。

笑茉の呼び掛けに気付いた女子生徒が文庫本から目を逸らし、真夜音の方をきつ、と睨む。憤りを訴えるような威圧感に思わず後退りしてしまう。続けて目だけを笑茉の方へぎよろつと動かす。それでも、笑茉は相変わらずである。

「……なんだ笑茉か。どうした、私に何か用か？」

「今日も会いに来てしまいました」

山吹色の髪の女子生徒は文庫本をぱたんと閉じると、低調で冷暗な口調をもって応じた。お互いの慣れたやり取りから、親しい仲だと真夜音は察した。それでも、女子生徒は微笑の一つも顔に表さず、興醒めたような目つきで笑茉と語り^{ふけ}に耽る。

「ところで」と女子生徒は話の転換をする。人差し指を鋭く真夜音に向け、またも冷ややかに発言をする。

「こいつは誰だ？」

礼儀を知らぬ子供のような、率直過ぎる振る舞いに、むかつと眉を顰^{ひそ}める。それでも、真夜音は前進する動きを見せない。というより、できない。心を見透かすような冷酷極まりないその目に、真夜音は密かな憚りを覚えていたのである。

「この子はA組に新しく編入することになった江津真夜音さんです」
目の前の女子生徒とは正反対の優しい口調で真夜音の心を和ます笑
菜。それを聞いた女子生徒は「ふむ」と慮^{おもんばか}る。そして、威圧的な指
を降ろし、真夜音の方に目を向ける。

「先までのことは無礼に値した。ここで詫びさせてもらおう。すまな
い」

濃彩な黄髪を垂らし、深々と首を下げて、真夜音に謝意を示した。
言葉にはし難いが、この子は如何にも腹切りをしそうな勢いだ。真
夜音が慌てて擁護する。

「そこまでしなくていいよ。ほ、ほら頭上げてよ」

「では、その言葉に免じて。……そういえば正式に名乗ってなかつ
たな。では改めて、私は八御珠^{やしたまき}祈だ」

真っ直ぐな眼差しで自分の名を告げる珠祈。勇ましく、そして逞^{たくま}
しい。だが、堅苦しいといえれば堅苦しい。まるで御門を敬う古来の武
将だ。

そして、あの氷のような瞳は警戒のためだけのものだったのか。こ
の珠祈という生徒と真夜音にはお互いが反発し合う水と油のような
何か隔たりがある。些細な違いではあるが、やはり真夜音と笑菜で

は待遇が違う。そのようなことを考えながら、真夜音は少し息苦しさを感じていた。

「それでは時間も迫ってきたので、お先に失礼します。これから《首領決定選挙》があるみたいなので」

「そうか、わかった」

こうして、真夜音と笑菜の二人は食堂を後にする。ただ、一つ真夜音には気掛かりがあった。あの部屋を出るときに背筋に走った力強い視線の冷たさ。きつとこの時に確信したのだろう。水と油がお互いをすり潰そうとしたことを。

〈EPISODE 5 凶兆〉（後書き）

前々回で後書きは自重すると書きながら、早くも裏切ることになりました。

今回の話でちょこっただけ雰囲気が変わりました。幾度か現在の話では理解しにくい言葉が出ましたね。もちろん気付きましたよね？

念のため書きますが、《百合メインではありません》。あくまでもオマケです。

話の内容と合致してきたらタグを増やしていきたいと思っています。

遅筆ですが、どうか温かい目で見守ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3319x/>

海老とマヨネーズと玉子

2011年11月9日03時11分発行